平成三十年度入学試験問題　国　語（五十分）

二月一日（午前）　実施

〔注　意〕

一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
二、問題冊子は15ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
六、試験終了後、解答用紙だけでなく問題冊子も集めます。
七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督（かんとく）の先生に知らせてください。

受験番号

氏　名

東京女学館中学校

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ぼくは気が［A］していました。姉さんの髪の毛をひっぱって泣かして、しかられたのです。もとはといえば、姉さんが、ぼくのえんぴつを勝手に持ちだしたことから始まったのですから、ぼくばかりがしかられるわけはないと思うのですが、母さんは、いつだって、ぼくのほうを悪いことにするんです。腹が立ったから、〈ごめんなさい〉を言わないで行こうとしたら、母さんの針箱のへりをふんでひっくり返し、こまごました中身を、たたみの上にぶちまけてしまいました。

「ほれ、また。——ふくれっつらして歩くからだよ。」

と、母さんは言いました。ぼくは、拾いかけたところへそう言われたので、よけい［B］して、そのままげたをつっかけて、飛び出してしまいました。

ぼくは横道を見つけては、入ってみました。どこでもいいから、目新しいところへ行ってみたい気がしたのです。あてずっぽに歩いているうちに、ほんとにぼくは、まだ来たことのない、汚い通りに出ました。フロ屋と大衆食堂との間の路地に、①夕日がななめにさしていました。

ぼくは、まだむしゃくしゃしながら歩いていきました。と、一軒の店の前に、ぼくの足は、くぎづけになってしまったのでした。

小さな、うす暗い、その店の中には、ひびの入った火ばちだの、黒ぬりのタンスだのが、ごたごた置かれていました。ぼくのうちの物置につっこんであるようなツヅラもあれば、後ろのかべにはバイオリンと細長い鏡が並んで、どっちもどっちというように、すすけていました。ぼくたち子どもにはおもしろくもない、それら古道具のなかで、ぼくの目をとらえたもの——それは一枚の絵だったのです。

（おばあちゃんだ！）

ぼくは心でさけんで、店に一歩ふみこみました。額ぶちはない大きな板にかかれているその絵には、ぼくの死んだおばあちゃんが、背中を丸くして座っているではありませんか。茶色いたてじまの着物、灰色の髪、うれしくてたまらないようにほころばせたしわの顔——まぎれもない、ぼくのおばあちゃんです。おばあちゃんが手に持っている風ぐるまにも、見おぼえがあります。

それは、ぼくがまだ学校へあがらないころのことでした。姉さんが画用紙を一枚くれたので、ぼくは風ぐるまを作りました。外へ出て走ると、よくまわります。ぼくは、大好きなおばあちゃんに、この風ぐるまをあげたくなりました。でも、おばあちゃんは足が悪いので、ゆっくり歩くのがせいぜいなのです。走れないおばあちゃんに風ぐるまをあげても、しようがないでしょうか？

「おばあちゃんは、風ぐるまなんか嫌い？　まわせない？」

ぼくはおばあちゃんのところへかけていって、たずねました。おばあちゃんは、にこにこと、ぼくの顔をながめて答えました。

「大好きだよ。風ぐるまは、きれいだものね。おばあちゃん、まわしてみようか。」

おばあちゃんは、ぼくの手から風ぐるまをとり、口をすぼめて、ふっとふきました。クレヨンでぬった風ぐるまは、にじのようにまわりました。

そのときの笑顔なのです。ぼくは、なつかしさでいっぱいになって、絵に見いりました。すると、なんだかこの絵をかいたのは、このぼくだったような気がしてきました。そんなはずはない、ぼくは油絵なんかかいたこともないし、かいたって、こんなにうまくかけるわけはない——と、うちけしてみても、たしかに、いつかどこかで、ぼく自身がかいたおぼえがあるように思えてならないのでした。

そのとき、後ろで足音がして、②のっぽな男が店に入ってきました。自動車の修理屋みたいなズボンをはき、皮のジャンパーを着たその人は、例の絵を指さすといいました。

「ちょっと。その絵、ほしいんだがね。」

ぼくは、胸が［C］しました。この人は、おばあちゃんの絵を買っていくのだろうか？

暗い店のすみっこに、がらくたにうずもれている絵が、よりによって目にとまったなんて——。

男は、店の人に値を聞くと、さっさと金をはらって、絵をかかえて出て行きました。ぼくはすぐ、あとを追いました。おばあちゃんの絵を持っていかれてしまうのを、とめることはできないけれど、せめてもうしばらく見ていたかったのでした。

ぼくは男に追いついて、それとなく絵をながめました。しかし、ぼくは［D］しました。絵は、男のうでに、うらむきにかかえられていたからです。と、男がふいにふり返りました。

「絵が見たいのかね？　見せてあげるよ、そら。」
男は絵をかかえなおして、ぼくのほうにむけました。
「見てもいい？」
ぼくは、うれしくなって、そばへ寄りました。すると男は、しごく当たり前のように言ったのです。
「いいとも。きみのかいた絵じゃないか。——そうだろ？」
ぼくは、返事ができませんでした。
③「そうだ」と、はっきり言うことはできないけれど、「ちがう」と言っては、うそになるような気がしたのです。ぼくは、答えのかわりにたずねました。
「おじさんは、この絵をどこへ持って行くの？」
「めもああある美術館へさ。そうだ、よかったらきみも来ないか？　そこの角をまがってすぐだから。」
めもああある美術館だって？　ぼくの住んでいる場所の近くに美術館があるなんて話は、聞いたこともありません。でも、ぼくは、一緒に行くことにしました。この男は悪い人とは思えませんでしたし、なによりも、このおばあちゃんの絵が美術館のかべにかけられるのが見たかったのです。
角をまがったところは、思いがけない美しい道でした。じゃりをしきつめた広い道路の両側に、芽をふきかけたポプラの並木が、遠く見えなくなるまで続いていました。そんなに遠くない右側に、たまご色の四角な建物が見えました。
「あれだよ。美術館。」
と、男は言いました。
「だれでも入っていいの？」
「建物には、だれでも入れるが、中の部屋は、ぜんぶ自由に出入りできるというわけじゃない。きみが入っていける部屋は、たったひとつ。——でも、それで十分だよ。ひと部屋に、④絵は見きれないほどあるんだから。」
話している間に、ぼくらはもう美術館の前に来ていました。男は、いかにも⑤勝手知った様子で、正面の石段を上がっていきました。玄関のホールにも、そこから奥へのびている廊下にも、人の姿はありませんでした。絵をかかえたまま先に立っていく男

について、ぼくも廊下を入っていきました。ぼくたちの足音だけが、後からつけてでもくるように、建物の中にこだましました。廊下の左右に並んでいるとびらの上には、知らない男や女の名前を書いた木札が、ひとつひとつ、かかげられていました。札がかかっていなかったら、見分けがつくまいと思われるほどそっくりな、かぎりないとびらの列でした。

「さあ、きた。ここだ。」

男は、ようやく、ひとつのとびらの前に立ち止まって言いました。なにげなく見上げたぼくは、E しました。とびらの上には、ぼくの名前——一字の間違いもない、ぼくの名字と名とが書かれているではありませんか！

「この部屋には、きみはいつでも、好きなだけ入っていいんだよ。きみの絵をかけておく部屋だからね。きみより他の人間は、だれも入ることはできない。これまで見てきた、たくさんのとびらのどれにも、きみが入れないのとおんなじにね。」

男は、ポケットからかぎのたばを取り出して、ひとつ選んでかぎ穴にさしこみました。とびらが開くのを待ちかねて、⑥ぼくは中へ入りました。部屋は、⑦ぼくが思わず声をあげたほど広くて、静かな光にみちていました。かべというかべに絵が額に入ってかかっていました。本当に、見きれないかと思うほどの、おびただしい数でした。

「はじから、ゆっくり見ていくんだね。」

後から入ってきた男が言いました。美術館のあるじだか番人だか知りませんが、この男ひとりだけは、どの部屋にも自由に入る権利を持っているのだとは、今さらたずねるまでもありませんでした。言われたとおりぼくは、一番手前の額の前に歩み寄りました。と、ぼくはもう、なにも忘れてその絵に見いりました。

「ペスだ！うちにいたペスだ！」

そこにえがかれている、茶ブチの耳の長い犬は、ずっと前ぼくのうちでかっていた、雑種犬のペスでした。ぼくは、ひとりで縁側に上がるのさえやっとなくらい小さかったのですが、この犬の姿は、うすれかけたそのころの記憶の中に、浮き出すように残っています。絵には、ペスと、これもおかしいほどはっきりおぼえている、緑色のせとびき鍋——ペスのえさいれ——がえがかれ、⑧まわりはいちめん青っぽい灰色にぬられていました。

「ペスばかりながめていないで、他のも見てごらん。」

うながされて、ぼくは次に進みました。今度の絵も、思いがけないものでした。赤いちゃんちゃんこを着た、よちよち歩きの

女の子です。スエちゃんというこの女の子も、ぼくはよくおぼえていました。ぼくがいたずらをおぼえ始めた四つ五つのころ、隣に住んでいた子です。ぼくは、うちで姉さんたちからやられるとおりの意地悪を、この子にしてやって、いつも泣かしたのでした。スエちゃんは、まもなく死にました。ぼくがいじめたからではありません。ハシカにかかって死んだのです。でも、いじめた子の絵なんか見るのはおもしろくないから、ぼくは先へ進みました。

次の絵もまた、ぼくのこころにありありと残っているもの——おもちゃの機関車です。大阪のおじさんが泊まりにきたとき、おみやげにくれたこの機関車は、ぼくの一番のお気に入りでした。

その隣は、額ぶちだけで絵がありません。

「そら、ここにこいつが入るんだ。たしか一枚入るはずだと思って、探していたのさ。」

男は額をおろして、持ってきたおばあちゃんの絵をはめ、またかべにかけました。

ぼくは、次から次と絵を見てまわりました。

真新しいランドセルをしょった、一年ぼうずのぼく。

初めての受け持ちの加藤先生。

学校に通う道で、いつも棒を振りまわしてアカンベをした、おっかない子。

かけっこで、一等をとった、二年の秋の運動会。

三年の夏に、すんでのことでおぼれかけた大川。

四年生になってまもなく転校していった、仲良しの木下くん。——

ひとつとして、なつかしくないものはありません。

しかし、見ていくうちには、目をつむって通りすぎたくなる絵もありました。あそこに窓ガラスの割れている絵があります。うちの近所の写真屋のかざり窓です。あれは何年生のときだったでしょうか。ぼくは四、五人の友達とボール投げをしていて、写真屋のガラスを割ってしまったのです。あやまちで、したのだけれど、ぼくらは謝らないで、逃げてしまいました。しかも、仲間のひとりを、置き去りにして。——置き去りにされた子は、徳ちゃんという名で、耳がきこえず、口のきけない子どもでした。口がきけないから、つかまって叱られても、だれがやったかつげぐちできないだろうと考えて、わざと年の小さい徳ちゃ

んを置いてきぼりにしたのでした。そら、泣いている徳ちゃんと、目をむいて怒っている写真屋のおじさんの絵が出てきました。ぼくは横をむいて通りすぎます。けれど、この絵もやっぱり、いつか、ぼく自身がかいた記憶があるような気がしてならないのです。

次にかかっている、リヤカーをひいたおじいさんの絵。これにもたしかにおぼえがあります。学校へ行く途中の坂で、ぼくは、このおじいさんに出会ったのです。リヤカーには、しょうゆだるがいくつも積んでありました。おじいさんは、腰がまがって、車をひいていくのがいかにもたいぎそうでした。ぼくは、よっぽど後押しをしてやろうかと思いました。が、［F］しながら、ついに手を出すことができませんでした。口の悪い友達がそばにいたので、

「なんでい。先生にほめられたがって。」

と言われるのが、嫌だったのです。あのとき、ほんのこれっぽかし気が強かったら、後押ししているぼくの姿と、おじいさんのよろこんだ顔が、この絵にかき加えられていたでしょうに。

その隣の絵は、ぼくは大いばりで見ることができます。ボール紙で作った家の絵です。去年の夏休みに、ぼくはこの模型を作って、市の展覧会で金賞をもらったのです。メダルを胸につけ、模型をかかえた、ぼくの肖像画。——なんてうれしそうな顔をしているのでしょう？

ぼくは、時のたつのも忘れて、かべづたいに歩いていきました。とうとう、最後の絵の前に来ました。その絵には、ふくれっつらをして針箱をけとばしているぼくがいます。ぼくは思わず、かたわらの男を見上げました。見おろした男の目は、笑っていました。ぼくも、⑨赤くなりながら、笑ってしまいました。

⑩最後の絵と言いましたが、額ぶちは、この先にも無数にかかっていました。が、それらの中は、まだ何もかかれてなくて、真っ白なのでした。

「ね。」

と、男は言いました。

「きみはね、これからも絵をかき続けていくんだよ。このたくさんの額の中に。ここの美術館には、だれでも、いつでも、見に来ることができるんだ。⑪以前に自分のかいた絵を見るのは、楽しいものさ。」

ぼくは、こっくりしました。

「それでは、遅くなるからおかえり。またおいでね。このなかの、どれか一枚でも見たくなったらね。」

男は、玄関の石段の上まで、見送ってくれました。外へ出ると、並木のはてに真っ赤な太陽がかかって、ぼくの影が長っぽそく、道の上にのびていました。ぼくは、じゃりをふんで、⑫ゆっくりゆっくり歩いていきました。

ふとわれに返ったとき、ぼくは自分の家の前に来ていました。赤々と燃えるような地面から、湯気がたちのぼって、もう春が近いのでした。

（大井三重子『めもある美術館』より）

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一　本文中の［A］～［F］に入る最も適当な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ語を二度用いないこととします。

ア　どきどき　　イ　がっかり　　ウ　むっと　　エ　くさくさ　　オ　びくびく

カ　はらはら　　キ　びっくり　　ク　うるうる

問二　――線①「夕日がななめにさしていました」とありますが、

（1）この物語全体の時間の流れの説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　はじめは夕方だったが、終わりは夜になっている。
イ　はじめは遠くに見えていた夕日が、終わりは近くに見えている。
ウ　はじめは夜になりかかっていたが、終わりは夜が明けて朝になっている。
エ　夕暮れ時からはじまり、一日たった日没前で終わっている。
オ　はじめも終わりも夕暮れで、それほど大きな時間の経過はない。

（2）（1）がわかる描写を本文の後半部分から一文で探し、はじめの五字を答えなさい。

問三　――線②「のっぽな男」とありますが、この「男」がどのような人物であるかについて説明している一文を本文中から探し、はじめの五字を答えなさい。

問四　――線③「『そうだ』と、はっきり言うことはできないけれど、『ちがう』と言っては、うそになるような気がしたのです」と同じ内容を詳しく述べている一文を、これ以前の本文中から探し、はじめの五字を答えなさい。

問五　――線④「絵」とは、この文章の中で何を暗示していると考えられますか。本文中から漢字二字の語を抜き出して答えなさい。

問六　――線⑤「勝手知った」とはここではどのような意味ですか。本文の内容に合う具体的な表現に直し、「様子」に続くように十字以上十五字以内で答えなさい。ただし、――線⑤と同じ表現は使わないこととします。

問七　――線⑥「ぼくは中へ入りました」とありますが、「ぼく」が「入」った「部屋」とは何を暗示していると考えられますか。本文中から三字でそのまま抜き出して答えなさい。

問八　――線⑦「見きれないかと思うほどの、おびただしい数でした」とありますが、本文中で紹介されている絵は何枚ですか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　五枚　　イ　十枚　　ウ　十五枚　　エ　二十枚

問九　――線⑧「まわりはいちめん青っぽい灰色にぬられていました」とありますが、何がどのような状態にあることを表していると考えられますか。本文中の言葉を用いて十字以上十五字以内で答えなさい。

問十　――線⑨「赤くなりながら、笑ってしまいました」とありますが、この時の「ぼく」はどのような気持ちでしたか。自分の言葉で十字以内で答えなさい。

問十一　――線⑩「最後の絵と言いましたが……真っ白なのでした」とありますが、次の額ぶちに入れられる絵はどのような絵だと考えられますか。具体的な絵の内容を五十字以内で説明しなさい。

問十二　――線⑪「以前に自分のかいた絵を見る」とは具体的にはどのような行為を意味しますか。「行為」に続くように、自分の言葉で十五字以内で答えなさい。

問十三　――線⑫「ゆっくりゆっくり歩いていきました」からうかがえる「ぼく」の様子の説明として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　一日の間にいろいろなことがあり、心身に疲れを感じている様子。

イ　今日見たたくさんの絵を、しみじみ思い返している様子。

ウ　これまでの自分をふり返る機会をもって、心が落ちついている様子。

エ　最後の一枚の絵が気になって、後ろがふり返れない様子。

オ　もう一度絵が見たくなり、美術館に引き返そうか、迷っている様子。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

最近知り合った友人のなかに①「便利屋」でアルバイトをしていたという人がいた。②便利屋と呼ばれる新商売が、かなりの勢いで定着してきているという話は僕も耳にしていた。要するに「なんでも屋」である。事務所に注文の電話がかかってくる。アルバイターたちは注文主の家を訪れ、一時間いくら、あるいは仕事内容によっていくら、というようなかたちでどんな仕事でも引き受けるのである。

犬の散歩、掃除、草取り、ペンキ塗り、犬や猫の死体の埋葬、時にはパーティーへの代理出席や墓参りの代理を頼まれたこともあった。そのなかで一番多い注文は、次の二つの仕事だったそうである。ひとつは風呂場の掃除、確かにこれは自分でするにはめんどうな仕事の部類に入るかもしれない。しかしなんといっても一番多い注文は、依頼主の相手をするという奇妙な③「仕事」であった。

要するに座って依頼主の話し相手や食事の相手をしていればよいのである。依頼主は誰でもいいから自分の話を聞いてくれる相手を探していた。便利屋たちは、黙って依頼主の話に相槌を打っていれば「仕事」は終わる。もちろん依頼主は比較的お金のある独り暮らしの老人が多い。言うまでもなく彼らは淋しいのである。しかし何時間か彼らの話相手をして、お金をもらって帰って来る人たちも淋しい。それで彼はこのアルバイトをやめた。

明治以降の日本は、④西欧の理念や精神、社会をモデルにして、そこに近づくことを目標にしてきた。日本人たちのみてきた西欧、それは近代的自我にもとづく個人主義の精神と、それによってつくられている社会であった。A ⑤西欧が個人主義の世界だと思っていたのは、社会の半分しかみていない誤解だったのではないかと僕は考えている。B イギリスで独り暮らしをしている老人から、こんな話を聞いたことがある。

〈私たちは孤立して生活しているが、孤独ではないのです。家を一歩出れば、私たちの友人たちの集うカフェやバーがいくらでもあるのですから。私たちは孤立しているからといっても孤独ではありません〉。

C 西欧は個人主義をひとつの原理にしているかもしれない。しかしそれを支えるように、仲間たちの協同する社会が必ずつくられているのである。その協同社会の役割は、庶民になればなるほど強くなっていく。つまり仲間や友人同士で、語り合

い、助け合い、はげまし合っていく社会がしっかり根を張っていて、その上に個人主義の社会もできているのである。ヨーロッパに僕が滞在していたときに住んでいた労働者の街になると、そこの労働者たちにとっては仲間や友人たちの社会がすべてであって、個人主義などというものは、お互いの労働を尊重しあうという以外のものでは、なくなってしまっているぐらいである。

D 上流階級になると、助け合う仲間の社会をつくることはないが、そのかわり、家族、血縁にもとづく強固な一族の社会を形成している。

どうやら日本の人間たちは、西欧の世界を、そうして個人主義の精神というものを誤解していたのではないかと僕は思う。その結果、西欧の一面だけを明治以降追いつづけてきた。いまでは確かに日本も個人主義の社会になっている。だが職場にも、地域にも、助け合いはげまし合うどころか、本心を語り合う友人さえいなくなってしまったのである。

現在では日本が世界で一番個人主義的な社会になってしまったかのようである。誰もが手を貸してくれる友人も仲間ももたずに、これほど淋しい思いで暮らしている国は他にはないだろう。そうでなければ、「⑥」などという商売が定着するはずはない。

僕たちは心のどこかで、友人や仲間たちと集う社会を持ちたいと望んでいる。最近小さな新興宗教が各地に生まれてきているけれど、その多くは信ずることより、⑦ことへの憧れからはじまっているような気がするのである。そういえば僕にも最近いろいろな誘いがかかるようになった。大抵は昔の友人たちが集まって、将来に向けて結束を固めていこうといった類のものである。

老イギリス人の言葉を借りれば、日本に住む僕たちは⑧。信頼できる友人がいないから、というだけではない。自分が何らかの役に立っているという実感がないのである。そうしてその実感は集団をつくることによって、はじめて実現できる。なぜなら役立っているという実感は、人間と人間の関係のなかで生み出されるものであり、⑨またそれを持ち得ないとき人間は孤独なのである。

個人主義を理想にして、しかしそれに行きづまり、いま僕たちは仲間とか友人という言葉の貴重さに気づきはじめた。お互いの役割を認め合える仲間たちの社会、僕たちの未来のために、僕もまたそれをつくりたいと思うようになってきた。

（内山節『自然と労働』より）

問一　本文中の［A］～［D］にあてはまる語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ語を二度用いないこととします。

ア　だが　　イ　もっとも　　ウ　確かに　　エ　たとえば　　オ　要するに

問二　――線①「『便利屋』でアルバイトをしていたという人」とありますが、この人がそのアルバイトをやめたのはなぜですか。本文中の語句を用いて六十字以内で理由をわかりやすく説明しなさい。

（下書き用）解答は、必ず解答用紙に記入すること。

問三　――線②「便利屋と呼ばれる新商売」とありますが、その仕事内容が説明されている部分を、「こと」に続くように本文中から五十五字以内でそのまま抜き出し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

問四　――線③「仕事」とありますが、ここでの「仕事」にカギかっこが付いているのはなぜですか。理由を説明した次の文の［Ⅰ］～［Ⅳ］にあてはまる語句を答えなさい。ただし、［Ⅰ］・［Ⅱ］・［Ⅳ］はそれぞれ本文中から指定の字数でそのまま抜き出し、［Ⅲ］はあてはまる漢字一字を自分で考えて答えなさい。

普通、仕事とは［Ⅰ　四字］なものであることが多いが、この仕事は［Ⅱ　九字］だけという［Ⅲ］な内容のもので、普通の仕事とは異なる［Ⅳ　二字］な仕事なので、普通の仕事と区別するためにカギかっこを付けた。

問五　――線④「西欧（せいおう）の理念や精神、社会」とありますが、日本が目標として見てきた西欧のそれらはどのようなものですか。本文中から三十五字以内でそのまま抜き出し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

問六　――線⑤「西欧が個人主義の世界だと思っていたのは、社会の半分しかみていない誤解だったのではないかと僕（ぼく）は考えている」とありますが、筆者は西欧の世界をどのようなものだと考えていますか。まとめて述べられている一文を本文中から探し、はじめの五字を答えなさい。

問七　［⑥］にあてはまる一語を、本文中からそのまま抜き出して答えなさい。

問八　［⑦］にあてはまる語句を、本文中から十字でそのまま抜き出して答えなさい。

問九　［⑧］にあてはまる語句として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　孤立（こりつ）していないが孤独（こどく）なのである
イ　孤立しているうえに孤独なのである
ウ　孤立しているが孤独ではない
エ　孤立していないうえに孤独でもない

問十　――線⑨「それ」は何を指していますか。最もわかりやすく説明されている部分を、本文中から二十字以内でそのまま抜き出して答えなさい。

三　次の――線部分のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

1　よくケントウしてから決める。
2　災害へのタイサクを練る。
3　台風で大雨ケイホウが出る。
4　適切なショチをする。
5　シャソウを流れる景色を楽しむ。
6　商品のセンデンをする。
7　相手にソンダイな態度をとる。
8　五万人の大カンシュウ。
9　先生の言葉を心にキザむ。
10　税金をきちんとオサめる。

国

平成三十年度入学試験　二月一日(午前)　実施　東京女学館中学校

国語解答用紙

(字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。)

一　問一　A　B　C　D　E　F

問二　(1)　(2)

問三

問四

問五

問六

様子。

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

行為。　問十三

二　問一　A　B　C　D

問二

問三　〜　こと。

問四　I　II　III　IV

問五　〜

問六

問七

問八

問九

問十

三

1	5	9
		む
2	6	10
		める
3	7	
4	8	

受験番号

氏名

評点